

報告―木村莊八《樹の風景》について―

安藤 里恵

はじめに

木村莊八の《樹の風景》は二〇一一(平成二三)年度、当館に収蔵された作品である。緑色を基調に、枝分かれする樹々を描いた作品であるが、筆者は描かれたモチーフとは別に、表面の絵具層に妙な違和感をもっていた。この違和感がはつきりしたのは写真撮影の時であった。作品に当てた照明の反射が、表層の絵とは無関係に現れていたのである。これは、描かれた樹々の絵具層とは異なる凹凸が存在することを意味しており、このことは下層にはかの画像がある可能性を示すものであった。のちに詳しくみていくが、カンヴァス裏面には作品名と思われる「とたん屋根」という文字が記されており、おそらく以前はこの作品が描かれていたのではないかと推測された。ところで第二回フェウザン会目録を参照すると、木村莊八は《亜鉛屋根》という作品を出品している。屋根に葺かれる亜鉛といえは、亜鉛によってめっきされた鉄板である。トタン²のことを考えるのが自然だろう。よって、絵具層の凹凸と裏面の文字情報をふまえると《樹の風景》の下層には他の画像が存在すると考えられ、そしてそれは第二回フェウザン会出品作の可能性が あることを示していた。

以上のことから当館では、下層の画像を調べるためにX線透過撮影を行った。本稿は、《樹の風景》撮影調査の結果から、作品がどのように構成されているかを報告するものである。

作品の構造

この作品は、経糸が1cm¹あたり十三本、緯糸が十六本の平織りの麻布を支持体とした油彩画である(挿図1)。画面の寸法は四五四mm×三三四mmであり、木枠に張り込まれている。作品は、支持体の麻布、白色の地塗層、絵具層、ワニス層から成る。支持体は洋釘で木枠に留められており、全ての釘に錆がみられる。地塗層は摩耗し、部分的に支持体の地が露出している。凹凸のはつきりした筆致が残る絵具層



挿図1 通常光による撮影

には深い亀裂がはしり、右辺上部および下辺の署名部分にはそれぞれ三mm大の剥落がある。左辺ではカンヴァスの端まで絵具がのっており、その先は切り取られている。カンヴァス耳部分に塗られた緑色の絵具には亀裂や欠損がある(挿図2)。画面周縁部では、縁から三〜五mm幅にわたり絵具層及び地塗層が失われている。ワニス層は全体的に埃で汚れ、黄変している。署名は、年号一桁部分が不鮮明で読み取りにくい状態ではあるが、画面左下に「5.1913 Shohachi」と黒色絵具によって書かれている(挿図3)。

斜光線による観察(挿図4)では表層の樹々の形とは無関係な凹凸があらわれる。無数の亀裂が画面を横断し、カンヴァスを縦断する二本の折れ跡がみられる。

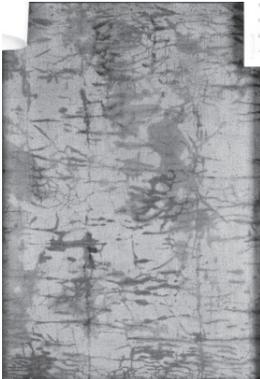
作品裏面(挿図5)には三枚の紙が木枠に添付されている。上部左の紙には「樹の風景 大2 木村 莊 八 Landscape with trees 1913 KIMURA, Shohachi」と書かれる。一部は接続が外れており、紙も黄変し始めている。上部中央には「樹の風景 草土社(191□□)」と書かれた木村莊八遺作展のラベルがある。ここに書かれた制作年の年号一桁の部分は「4」と他の数字が重ね書きされており、はっきりとわからない。上部右には木村の名刺が貼られる。木村の名前と住所が印刷され、「樹の風景」の鉛筆書きがあり印が捺されている。木枠下辺には



挿図3 画面左下、署名部分



挿図2 側面部分



挿図6 カンヴァス裏面に記された文字



挿図5 カンヴァス裏面



挿図4 斜光線による撮影

「S・Kimura 1914」と書かれている。

カンヴァスの裏面では、上部中央に不鮮明ではあるが黒色で「とたん屋根」、下部に「木村」と書かれている(挿図6)。裏面にあらわれたしみは、絵具の亀裂に沿ったものと輪郭のはっきりしないものとの二種類が全体に広がっている。絵具の亀裂と呼応するように、カンヴァス下部に向かうにつれ横に走るしみが多くみられる。裏面全体に埃が付着して汚れており、カンヴァス地は柔軟性を失い硬化している。



挿図7 X線透過写真
(撮影条件 電圧:35kV 電流:3mA 照射時間:360sec 使用フィルム:FUJI IX50)

下層の図像

表層の画面とは異なる絵具層の凹凸や裏面に書かれた作品名から、下層に別の図像が存在すると推測したことは先に述べた。そこで下層の図像を確認するために、三重県立美術館・田中善明氏のご協力を得てX線透過撮影を行った(挿図7)。画像に白く現れた部分は、X線がフィルムの感光乳剤に作用したところであり、照射されたX線を反射する厚い絵具層あるいは鉱物を含む絵具が使用されていると考えられる部分である。黒い部分はX線が透過した箇所であり、反射する物質がなかったということを示している。

当初の予想では裏面に書かれている「とたん屋根」を描いた風景画があらわれるものと思われたのだが、画像には着物を着た婦人が写し込まれた。右を向いた和装の婦人は、手を膝の上に置くようにして着座している。画面全体に亀裂が走るが、下部に進むにつれ亀裂の間隔が狭くなり量も増えている。これらの亀裂の位置は、カンヴァス裏面にあらわれたしみとほぼ一致している。この婦人像の絵が、ある程度の完成をみせていたことはこの画像からわかるだろう。

木村には、このX線写真と似たバスタップの構図で、祖母や母を描いた作品が残っている。《樹の風景》画面左下の署名の日付より後のことになるが、一九一三年の十一月には福田和五郎の娘であ

る万寿(ます)と結婚し、万寿をモデルとした作品も残されている。モデルが誰であるかは様々な可能性が考えられるが、現段階での特定は容易ではないだろう。

考察

このカンヴァスに最初に描かれた作品が《とたん屋根》であると仮定して、絵具層が残っているのならば、X線写真の画像には風景と人物の二つの絵が重なるように写るはずである。だが、撮影された画像から明確に確認できるものは婦人像だけであった。ゆえに最初の絵具層は、婦人像を描く前に取り除かれたと考えられる。X線写真に示されているように下部の細かな亀裂があらわすことは、木村は婦人像を描いてから一旦カンヴァスを木枠から外し、画面下から上に向かって丸めて保管していたのではないか。カンヴァス裏面の輪郭のはっきりしないしみは、湿気のある環境に置かれた際にできたものと考えられる。そして《樹の風景》を描くために再び木枠に張って描いたが、その木枠は現在の木枠と少し大きさが異なると予想される。なぜなら、左辺側面に残された緑色の絵具には下地とは異なる筆の運びが見られることやカンヴァスが切り取られていること、作品側面の絵具層に釘で留められている跡がみられること(挿図2)、画面下部では端まで描写されていないことなど、いくつかの理由があげられるからだ。ワニスには現在の木枠の画面サイズで塗布されていることから、《樹の風景》は描かれてから一度木枠から外され、あらためて現在の木枠に張り込まれた後、ワニスを塗られたと考えられる。木枠下部の年号「1914」は、ワニスを塗布して完成とみなした年なのかもしれない。

もし《とたん屋根》が、一九一三(大正二)年三月のフウザン会第二回展に出品された《亜鉛屋根》と同一のものであったとするならば、木村はその後二ヶ月の間に婦人像と《樹の風景》のふたつの作品を、同じカンヴァスに描き上げていることになる。当初の《とたん屋根》がいつ描かれたのかは不明であるが、《樹の風景》には一九一三年の五月五日と明記されている。油絵具が完全に硬化するには数年から数十年の期間が必要とされているが、表層部分は一週間程度もあれば乾くため、二ヶ月の間に連続して描くことは物理的に不可能なことではない。おそらく木村は《とたん屋根》に保存価値を見いださず、婦人像を描くためにカンヴァスを再利用した。そしてその婦人像すらも保存することはなかった。婦人像では凹凸のある描写をしているため、おそらく描きにくさを覚える状態のカンヴァスであっただ

ろうが、木村はそれにかまうことなく上から新しい図像を描いたのである。《樹の風景》の絵具層が下層の婦人像の筆致を覆い隠すほど厚ければ、もしくは修復が必要になるほどにまで傷まなければ、下層にほかの図像があったことは判明しなかったかもしれない。

おわりに

修復が必要な状態ではないため、作品の調査はX線透過撮影、赤外・紫外線撮影(特記する情報が無いゆえ本稿では省く)、目視による観察等非破壊検査を中心に行っている。木村にとって保存価値が見いだせなくなった《とたん屋根》、さらに上描きされた婦人像がどのようなものであったかには興味を惹かれるが、現在のところそれ以上の情報は得られていない。今後、顔料分析や絵具層観察等の詳細な調査を実施できれば、さらに木村の制作過程等が判明するだろう。この報告が今後の木村莊八研究とともに作品保存修復の一助となれば幸いである。

付記

本稿の作成にあたり、絵画修復を専門にされている黒川祐衣氏に多くのアドバイスを頂いた。またX線透過撮影では三重県立美術館の田中善明氏のお力を借り貴重なご意見も頂いた。この場を借りて厚く御礼申し上げる。

(註)

- 1 当時のカタログには《亜鉛屋根》の図版は掲載されていない。『近代日本アート・カタログ・コレクション 第一巻 フェウザン会/草土社』ゆまに書房 二〇〇二年 六一頁
- 2 亜鉛が鉄の腐食を抑えるゆえ、トタンは屋外などの風雨に晒される場所で使用されている。一九〇七(明治四〇)年に関東都督府商高および地方法院にて亜鉛鉄板葺として用いられた記録があり、その後は専売局庁舎の屋根にも使用されるなど、錆びない建築材料として明治期の日本に普及した。武者英一、吉田尚英『屋根のデザイン百科 第二版』彰国社 二〇〇九年 五四頁
- 3 等倍で撮影されるため、フィルムは二枚にわたっており、(挿図6)は合成処理を施したものである。
- 4 田中淳『画家がいる場所』近代日本美術の基層から』アリュック 二〇〇五年 一一〇頁